

# 被災新聞

第339号

Designing The Future

KDDI

自助のヒント

緊急速報の精度改善

地震の発生を強い揺れの到達前に知らせることを目的とした緊急地震速報は、誤報や過大な震度予測が問題となるケースもあるが、東日本大震災の本震では、強い揺れに見舞われた遠方に発表できなかった。仕組み上、マグニチュード(M)8を超える巨大地震の規模を過小評価してしまうため、震災時の最大震度が5強だった神奈川にも速報は出なかった。その改善策を検討してきた気象庁は、22日に新手法を導入。各地の震度計が捉えた強い揺れのデータから周辺の震度を予測し、追加的に速報を発表する。

## 教訓継承に若者の力

東日本大震災の被災地では、復興が進むにつれて津波の痕跡を残す遺構が次第に姿を消し、教訓を後世にどう語り継いでいくかも課題となっている。そんな中、石碑の建立や震災前の街並み再現を通して、記憶の風化防止に挑む若者たちがいる。共通するのは、古里への強い思いだ。

人口の1割近くの827人。2011年4月に入学した生徒が犠牲になった宮城県大川町。町立大川中に、一つの石碑が立っている。震災直後の



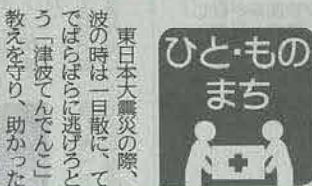
震災前の宮城県石巻市大川地区を再現した模型と永沼悠斗さん＝2月、石巻市

設置する計画で、住民の協力を得てこれまでに17基が完成した。今年中に、さらに3基が建つ予定だ。生徒のうち約15人は中学卒業後も有志で活動を続け、石碑の構想を考えたり、防災に役立つ教科書を作ったりする活動を続けてきた。リーダーの学校職員岡部由幸さん(19)は、風化を防ぐのは難しいが、自分や大切な人の命を守るために防災知識を身に付けてほしい」と語る。

## 石碑建立、模型で街再現

住宅や商店などを発泡スチロールで500分の1の大きさに再現。仮設住宅や集会所で聞き取りをし、1軒1軒に住民の名前や「自転車で軒下」といった思い出を書いた小さな旗を立てていった。一部は、多数の児童・教職員が犠牲になった市立大川小旧校舎近くの施設で公開している。永沼さんは「震災で地区を離れた人が『懐かしいなあ』と話すのがうれしかった。地域に育ててもらった恩返しをしていきたい」と胸を張った。

## 小学生に防災授業



## 避難の大切さ 紙芝居で

岩手県立釜石高2年生

いったん避難した高台の所にいても「津波でんて崖が崩れそうになり、兄んこで避難したから再会できた」と語り、永田里美さん(17)は「実際に家族4人が無事に再会する」とのストーリーだ。授業は2月27日、同小の4年生約30人を対象に実施。高校生が演じる紙芝居に、児童たちは真剣に耳を傾けていた。佐野さんは「家族が別々の場」と話した。



## 「壁新聞」の思い今も

石巻ニューズ館長勇退へ

別再開までの6日間、水没を免れたロール紙に被災状況や安全情報をフルタイムで書き、市内6カ所に掲示し続けた。「壊滅状態」各避難所で名簿を作成」などの文字が残る。

編集部長だった武内宏さんは「情報を求めて壁新聞の前には人だかりができた。心残りは、被災者でもある記者が必死に集めた情報を、10分の1も載せることができなかったこと」と振り返る。

資料館は震災の翌12年に開館。名称は「ニューズ」とフランス語で博物館を意味する「ミュージ」を合わせた。

震災から7年。街は少しずつ整えられ、新しい建物もできていく。「外からは復興しているように見えるが、心の面はまだまだ」と武内さん。特に震災で職を失った20代30代の若者が家に閉じこもるという。本来なら復興を担い、街づくりの中心になる世代。支援策を模索している。

4月から館長の職は後進に託す。「被災したみんなの思いが胸に重く残っている。記者人生と震災後の7年を整理してみたい」と話した。

## 千葉・旭出身神大生

市にある母の実家に避難しようとしたときに、迫り来る津波に遭遇し、「初めて死を意識した」。

神奈川大に進学後、重ねた東北へのボランティアで「本気の復興は心の復興」という言葉に出会い、成人となった2016年、グループを結成。「銚子市内の高校に通っていたときは『津波大丈夫だった』と声を掛けられたけれど、神奈川

## グループで活動広げ

では飯岡のことが知られておらず、寂しい思いをした」とも活動の原動力にある。グループではこれまで、飯岡の海岸で催されるイベントを手伝ったり、防災の冊子を作製し地元小学校に配ったりしてきた。

この1年は就職活動を優先させるを得なかったが、前日の3月は活動の機会が多く、若者の意識を発信する機会に恵まれた。追悼式では「私が大学に入学したころのように、知られていない現実、心を傷めている



東日本大震災7年の節目に自身の体験や思いを読み上げる大木沙織さん＝11日、千葉県旭市

## 被災の古里語り継ぐ

大木さんが通っていた震災当時の市立飯岡中学校は海岸から約200メートルしか離れていない。浸水被害を受け、4日後に予定されていた卒業式は延期された。学校で激しい揺れに見舞われた大木さんは、同級生と内陸の公園に避難。迎えに来た母の車で海辺の自宅にいったん戻り、隣の銚子



「石巻ニューズ」の武内宏之館長と石巻日日新聞社の壁新聞＝2月、宮城県石巻市